

カナダのジャスパー国立公園内にあるジャスパーイエローヘッド博物館に、仙台出身の榎 有恒 隊長がアルバータ山初登頂記念に山頂に残してきた 1 本の折れたピッケルと、メモ、「1925 年 7 月 21 日午後 7 時半、16 時間の健闘の後に頂上に達す。案内人フーレル、コーレル、助手ウィーバー以下 6 名の一行は、遥けくも日本よりこの偉大な山岳を慕いて来たれるものなり」が展示されている。

初登頂の時、アルバータ山頂上に残されたピッケルは、数奇な運命をたどることになる。アルバータ第2登(1948)のアメリカ隊が、山頂で折れたピッケルの本体とシャフトを持ち帰った。そして、長野高校 OB 登山隊が第 5 登(1965)の記念として残っていた石突部分を持ち帰った。

1997 年、日本山岳会の晩餐会に、カナダ山岳会会長が、ピッケルの本体とシャフト部分を持参し、長野支部からの参加者は石突を持って参加した。この 2 つが 50 年ぶりにピッタリと接合し、参加者の感動を呼んだ。

2000 年、アルバータ峰登頂 75 周年を記念したカナダ山岳会主催の行事があり、多くの日本山岳会会員が参加し、友好関係を深め合った。そして、2004 年、カナダスキーを楽しんだ日本山岳会アルパインスキークラブ会員が、カナダ山岳会会長とカナディアンロッキーでの山スキーについての話し合いをもち、2006 年 3 月、カナダ山岳会の全面的な力添えを得て、ワプタアイスフィールドと横断と登山が実現した。また、カナダ山岳会から派遣されたガイドとキャンプマネジャーは、人柄、技術ともに優れ、私たちの希望要求に誠実に応えてくれたことが、この度の成功の大きな要因になっている。参加者は日本山岳会アルパインスキークラブ 15 名。内男性が 11 名で、平均年齢が 71 歳という高齢者集団であった。A と B の 2 班に分けてそれぞれガイド 1 名と、キャンプマネジャー 1 名付きで、別々に行動した。

* カナダ山岳会クラブハウスと足慣らし

カナダ、ブリテッシュコロンビア州とアルバータ州の境をカナディアンロッキーが走り、太平洋と大西洋に流れる水系の境界、大分水嶺となっている。ここにはバンフ国立公園はじめジャスパー、ヨーホー、氷河などの国立公園が分布している。

今回(2006.3)、このバンフ国立公園の背骨にあたる大分水嶺東側を覆うワプタ氷原を、北西から南東にスキーを用いての縦断を試みた。途中、カナダ山岳会管理の山小屋に自炊で泊まり、3000m 級の山々に登りながらの山旅であった。

カルガリー空港から車で、100 km 離れたケンモアの郊外、林の中の山岳会クラブハウスに入った。ログハウスで大きなガラス張りからロッキーの山々が眺められた。暖炉のある談話室は、

山岳会資料はじめ図書、地図の書棚があり、テーブルなどと共に落ち着いた雰囲気漂っていた。その一方で、書籍、案内書や地図、帽子やフリースの上着などを販売し、ユースホテルも兼ねていた。

翌日、山旅に備えてレイクルイーズスキー場での足慣らしをした。バンフまで 24 km の道路両側は、針葉樹とアスペンポプラが繁り、動物の侵入防止用の金網が張られていた。スキー場にどうにか駐車できたが、ロッジでの席確保がままならず、車内での昼食となった。しかし、スキー場は、2 つの山(2500~2600m)の両面に切り開かれており、人影はまばらだ。意識して変化に富んだコースを目一杯滑ったが、霧と時々舞う雪で快適な滑りには程遠い状態だった。17 時過ぎ、スキー場内にある山岳会のスキーセンターに入る。夕食後、ガイドのダグが見え、明日からの装備の点検があった。

* カナダの国立公園

山岳会スキーセンターからボウ川に沿って北に 40 km、車で 30 分移動すると、青空の下のペイトー湖が見えてきた。目指すワプタ氷原への入口である。出発前、ダグから「ストックの手皮を外して握るように」の注意があった。国道から凍結した湖への降りは、深い樅の木の茂みだった。狭いジグザグのコースで、時々ストックが倒木に引っかかった。下手をすると肩の脱臼……ともなりかねない。

30 分で凍結した湖上に出た。距離感を狂わせるほどの白と平坦さの中にスキーを踏み出した。湖上の単調な平地滑走は 1 時間を要した。はじめは側堆石、氷河が運んできて氷河の脇に堆積した岩屑、に沿って登った。昨日の新雪が岩屑を覆っており、スキーを履いたままペイトー氷河に降りることができた。幸いした降雪は、氷河上のクレパスを覆い隠していた。ガイドは、5m 間隔でゾンデ棒によるクレパスチェックしながらの登りが続いた。ようやく凹凸の消えた雪面、ワプタ氷原は、凍りついた岩山の足元から大きいうねりながら広がっていた。そして、山際に半分雪に埋もれてペイトー小屋が建っていた。

山小屋は無人で、山岳会所有、管理している。プレハブ造りで、四隅をワイヤーで固定した質素なものだった。居住棟は、前室付きの一部屋で、片側が窓でガスレンジ、調理台、洗い場が並んでいた。通路を挟んで反対側は 2 段の蚕棚でマットが敷いてあり、まずは快適な寝所であった。照明は小さなガス灯、炊事用具、食器類は揃っていた。トイレは別棟で、少し離れていた。タンク貯蔵式で 2 つ、満タンになるとヘリで運び下ろして処理しているという。勿論、ごみはすべて持ち帰り、食器洗いなどの汚水の排出までも制限されていた。洗剤で洗ったものを布巾で拭きとって終りには抵抗があった。片側一面の長い窓からは、薄暮のロウンダ山に連なる雪の稜線と斜面が見え、ロケーションを考慮して建てることが伺えた。

カナダは、1867 年誕生の若い国だが、そのわずか 20 年後に国立公園のシステムが発足し、

世界で3番目の国立公園が誕生している。いわば国立公園先駆けの国である。国立公園の考えは、環境保護と生態系維持が2本柱で、広大な自然を手付かずで、あるべき姿を保つことだという。

これに対して日本の国立公園は、地域自然保護、風景の保護が柱で、国立公園内に住む人々の所有権や財産権を尊重し、産業との共存、1つの風景としての保全を主たる目的としている。要するに、国立公園の成り立ち、文化、歴史などが、2国間では全く異なるといえる。

* 山のカラス対策と氷原でのスキー

今日も晴れたが、気温が-5℃と高く明日の天候が心配だ。明日予定のロウンダ山(2970m)を前倒し、今日登ることにした。

小屋から100mほどのところに、ガイドお薦めの氷の洞窟に向う。間口10mほどだが、中は広く立って歩くこともできる。氷の床の所々に岩塊が出ていたが、上下左右の蒼氷は研かれたように凹凸がなく、反射するヘッドライトの光は幻想的であった。誰かが、「この氷でオンザロックを！」の声に、キャンプマネジャーが20cm四方の氷塊を運ぶことになった。

10時、ロウンダ山に向う。広い雪原をひたすら登った。昼食場所に荷物を置き、山頂を目指すことにしたが、ガイドとキャンプマネジャーが突然、雪を掘り始めた。何が始まるのか解らぬままにいと、皆のザックをまとめて窪地に置き、雪で覆ってしまった。カラスがザックを破り食い荒らすのだという。ふと、早春の知床で遊んでいた若かりし頃、見慣れたカラスよりも一回り大きな「知床カラス」が、物入れの蓋を開け、餌にもならないものをくわえて飛び去ったことを思い出した。それにしても、無人の氷原にどうしてカラスが居るのか、それとも人の気配を感じて街から飛んできたのか、どっちにしても不思議だった。

山頂から伸びる稜線に取り付くと傾斜が緩み、視界が開けてきた。カナディアンロッキーは、白い山に埋め尽くされていた。やがて平坦になったところが山頂で、高度計は標高2970mを指していた。風はなく、寒くもない。氷原滑降を前にガイドからの注意は、コースを大きく外れないように、スピーとは控え目に、間隔を十分に取っての3点だった。40~50cmのパウダースノーを蹴散らしてのザックデポ地点まで滑った。転んでも転ばなくとも全身雪塗れ、息を弾ませ、皆ハイテンションだった。全員揃ったところで、ガイドがおまけでもう1本滑るといって、瞬く間に黒点となってしまった。空身とはいえ、ペイトー小屋下から登り返しはきつかった。

シュプールを照らす陽光が柔らかくなった16時40分ボウ小屋に入った。今日は、昨日から泊まっているA班と一緒に。氷河の中から掘り出し、背負ってきた氷の入ったウイスキーでの乾杯にテンションがあがった。

* オリーブ山(3130m)とセント・ニコラスピーク(2941m)登頂

今日は、A、B 班合同でオリーブ山(3130m)登頂の日である。小屋を出ると直ぐボウ氷河への取り付きは、端堆石、氷河が運んできて氷河末端に堆積した岩屑、の急坂から始まる。馬力に任せて走り回れる年齢ではない。ゆっくり、しっかりした足取りで着実に高度を稼ぎ、セント・ニコラスピークを巻いてオリーブ山の稜線直下に出て昼食を取った。

山頂への稜線に出ると所々が凍結し始めていた。厄介なことに、こういう所に限って傾斜がきついか、痩せ尾根となる。まだ先にスキーによる登行跡が見えるが、行く手に横たわる岩場を前にスキーを脱いだ。3~4 人ずつロープで結び合い、雪と氷の岩稜に取り付いた。スキーと登山の兼用靴は少し大股になると足首の自由が奪われる。靴底の感触も鈍い。ワプタ側に張り出した雪庇に気を配ったルートは、時々吹き上げる雪と湧き上がる霧で隠れた。平坦な尾根の先に雪を被った岩山が見え、その先に流れる霧の中に純白で控え目の頂があった。山頂は、強風と霧で留まるところではなかった。

スキーデポ地に戻った。氷原は語らいと笑みに溢れた。岩陰の色とりどりのスキーは、岩と氷雪の世界に温もりを漂わせていた。

オリーブ山の行き帰りに眺め続けたセント・ニコラスピーク(2941m)は、ワプタ氷原に突き出た角であった。北側は 40~50m の垂直に近い岩で、雪の付着をも拒んでいた。南面は、頂に伸びる岩稜に隈取された急な雪の斜面だった。16 時という時間が気になったが、登りたいね！登ろう！となった。

希望により山班と山小屋班に分かれた。山班はガイドとキャンプマネジャーの先導で、山に向った。裾野でスキーを脱ぎ、鋸歯状の岩稜に張り付いた雪面の登りが始まった。20m の雪の急斜面は、キャンプマネジャーが固定してくれたロープを頼りに登る。そこには幅 60~70 cm のバンドが走っていた。バンド先端から 10m の岩と氷雪の壁がでてきた。ここはガイドがロープを下ろし 1 人ずつ導いてくれた。16 時 40 分、全員が頂に立った。すでに色を失った空の下に連なる山々、深く雪に埋もれた氷原は、モノトーンの世界となって広がっていた。時間的に許された山頂での時間は過ぎた。雪に隠れた足場を探りながらバンドまで降り、雪の急斜面を降りたところで、ようやく結び合ったロープから開放された。

山小屋班のシュプールは、朝方、息を弾ませ刻んだスキーの登行痕を何回か横切り、斜面を繋ぎ小屋へと伸びていた。

* 大分水嶺・ハイコル(2990m)越え

A 班より一足先に小屋を出た。ボウ氷河の端堆石の登りで息が弾みだした頃、レークレイズスキーセンター泊の A 班が小屋周辺に黒点となって現われ、列になって視界から消えていった。

昨日、登ったセントニコラスピークとは対照的にどっしりと腰を据えたゴードン山(3203m)が、

霧の切れ目から望まれた。計画では「登頂」だが、明日の本山行中最大の難所、大分水嶺のハイコル(2990m)越えに備えて断念した。

稜線に出ると、茫漠たるワプタ氷原と緩やかな傾斜のバルイチュア氷河が広がっていた。ホワイトアウトまではいかないが、薄い霧が視界を遮っている。氷原を覆う雪は凍結気味、ルート上に岩屑が目立ってきた。加えてザックの重さを考え、安全第一でスキーのテールをハの字に開いて滑るプルークと斜め前横滑りのデラパーージュに終始した。

14 時前に小屋に入った。一休み後、明日のルートの説明があった。明日のルートは、目の前の蒼氷を乗せた岩山と冰雪の塊が乱立する急坂だった。

この度のコースのハイライトは、大分水嶺の「ハイ コル」越えである。小屋前の雪に埋まった沢を横切ると、いきなり左上方に蒼氷を乗せた岩棚が覆いかぶさっていた。正面から右手にかけてはバルフォア山からの氷河が合流していた。

2 組になりロープを結び合いクレパス帯を抜け、懸垂氷河を斜め横から見えるまで黙々と高度を稼いだ。傾斜が緩くなり、積雪も少なくなったが、ガイドは繰り返し隠れたクレパスに神経を尖らせていた。1 歩ごとに氷原が前後左右に広がるようになって間もなく、待望のハイコル(2990m)だった。霧が視界を遮っているが、ガイドから「ヨーホー国立公園によろこそ！」の言葉に、緊張からの開放感に浸りきった。

国土の大半が山地で、無数の河川が流れている日本は、至る所に分水嶺があるはずだが、意識することはほとんどない。中学、高校で使用する地図帳にも、国土地理院で出している1/2.5 万の地形図にも分水嶺を示す記号はない。ある本によると、日本の国道の 180 本、鉄道の 61 路線が大分水嶺を横断しているというから、ちょっと遠出すれば必ず越えているのだが……。これがカナダ、アメリカになると、太平洋と大西洋に注ぐ水系を分ける「大陸分水嶺」(Continental Divide)が 1 本の線で道路地図にもしっかりと記入されている。どうも日本の「峠」のもつ言葉の響き、まだ見ぬ土地への憧れと似ている。大陸の国と島国の違いが、分水嶺の線と峠の点の違いとなって表現されているのだろうか。

風を避け休んでいると、霧が劇的に消えた。ガイドが「行くぞ！」の声を残して、青空の下に広がる無垢の雪を舞い上げ、シュプールを伸ばしていった。黒点と化したダグが止まった。緩傾斜での高度差 180m は、気が遠くなりそうな距離だ。低温と乾燥、弱い陽射しの下で風にさらされた雪は、我々に用意された天然の毛足の長いカーペットだった。足に絡む雪はシュッと鳴った。途中でバランスを崩しても立て直せる傾斜、全員が横一列で滑っても、氷原の大きさからすると縫い針の跡に過ぎなかった。息を弾ませ飛び込んでくる誰もが満足感に満ち溢れていた。そして、滑り疲れた所が昼食の場所となった。

山スキーには登り、歩行がつきものだ。滑りに比べれば楽ではないが、登りそのものにも色々な喜びもある。短いアプローチで氷原に達するワプタは、ゆったりとし、静寂が支配する日

常とかけ離れた世界である。高度に悩まされることもない。最高の山スキーが楽しめる舞台が整っていた。

* 怪峰ナイルス山

小屋から一旦氷河に降りて、褶曲地層の目立つナイルス山を目指した。近づいて見上げると、垂直に近い大きな岩峰で、山頂部に雪をのせた蒼氷が迫り出していた。基部の東面を通り抜けるにあたっての注意は、「間隔をあけ、ノンストップで急いで通り過ぎること」だった。崩落した氷雪の転がるルートにガイドが踏み出して行った。キャンプマネジャーが間隔を見極め、ゴーサインを出す。もし、崩落したら誰が見ても大事故になりかねない。吹きさらしのところには同じ思い出駆け抜けていったスキーの跡が残っていた。

全員が通過し終え、一息ついたところが、シェールブルック湖の源頭部だった。カール状の斜面は広く、急傾斜で、雪は凍結していた。ガイドが斜面一杯にデラパージュ気味に滑って、雪質を確認している。4回のギックターンでようやく傾斜が緩くなった。高度が下がると、雪はアイスバーンへと変化した。足元のガリガリザラザラの音と振動は、脳天まで響いた。小さな端堆石の斜面を滑り終わると森林帯に入り、陽だまりの中で昼食をとった。

この度用いた地図、「TOURING THE WAPTA ICEFIELDS」(1/5000)で、コースを確認していると、先ほどのナイルス山は、褶曲地層剥き出しの荒々しい四角形の岩山であったが、地図を見る限り等高線のみで表現されており、日本で用いている岩やがけの記号による表現はされていない。また、バルフォア小屋から大分水嶺のハイコルへの氷河地帯の等高線は、破線で不規則に示されており、何となく氷雪が複雑に重なり合っていることを想像させているが、ここでも岩などの記号は使用されていなかった。

最小限の施設で守られているカナディアンロッキーの山々が、険しい岩峰や氷河が瞬時に浮かび上がる地図描写の「記号」をどうして使用しないのだろうか、それとも存在しないのだろうか。

小さなアップダウンの曲がりくねった沢が続いていた。凍結した湖を横断し、森林帯を抜けるとフリーウェーに出た。行き交う車の音は、「Hut to Hut」(山小屋から山小屋)による氷原縦断完結の合図だった。回送された車で、ゴールデンの街を過ぎ、ロジャー峠のホテルに入った。今夜は温泉プール付きだった。6日ぶりに寝袋から解放され、シャワーを使った。

* カナダで最も積雪の多いロジャー峠

今日の予定は、宿泊するウイスラー小屋経由で、アサルカンブルック往復である。ホテルでのビュフェスタイルの豪華な朝食に思わぬ時間を取ってしまった。

登り口は、ホテルと目と鼻の先だった。かつて鉄道跡の平坦なコースを進み、ウイスラー小

屋に立ち寄る。昨日から宿泊している A 隊はすでに出発していた。樹林帯に伸びる谷に沿って登りはじめた。

ここ国道 1 号線ロジャー峠付近は、カナダでも降雪量の多いところで知られ、かつて列車が雪崩で脱線転覆、その救助隊も雪崩に遭う二重遭難があったところと聞いた。斜面の所々に雪崩の跡、薙ぎ倒された木々が残っていた。その上方に漏斗状の地形が広がり、雪崩が集ってくる所には、マウストラップの名が付いていた。2140m 付近で降ってくる A 班と会う。森林限界を越えた 2260m のアサルカン小屋は、石膏を流したような雪面の端に建っていた。アサルカン峠近くまで登り、見渡す限り雪だけの斜面の深雪を滑り出した。斜面の向きによって雪質が微妙に違った。

* 「熊」注意の看板と車のプレート

ウイスラー小屋からカナダ山岳会クラブハウスへの移動日である。小屋前で集合写真を撮った。車でゴールデン、レークルーズを経由してバンフに向う。途中、かなりの数の「動物 注意」の看板を見かけた。なかでも、黄色地に黒の熊が描かれたものが目立った。日本なら「熊出没注意！」となるのだろうが、カナダでは熊の方が先住者という目線が感じられた。「今、あなたは熊のエリアにいます」といったように、人間が邪魔している感じだった。熊エリアでの道路工事は、熊が冬眠する冬の間か、人里を遠く離れる夏に限定されるという。よく見かけた動物は、国道まで出てきている立派な角を持つマウンテンシープの群、山中のリスや鹿などであった。ハイウェイの制限時速は 90 km だが、動物の出るところは 70 km に制限されていると聞いた。

バンフで買い物をするため公共の駐車場に車を止めた。カナディアンロッキー観光の中心都市だけに、国内各州の車が止まっていた。車のプレートがカラフルで、州ごとに特徴ある絵や文言が書かれているのに気づいた。アルバーター州は、州の花であるワイルドローズの絵が赤で、青い文字で Wild Rose Country、ブリテッシュコロンビア州は、Beautiful British Columbia と The Best Place On Earth、オーロラで知られるイエローナイフのあるノースウェスト準州は白熊の形のプレートで、Explore Canada's Arctic とあった。お世話になったドライバーは、高速道路の 99% が無料だったが、道路標識が小さく見難いとか、乗入れ口や出口への不満を口にしていた。

19 時からクラブハウスで、カナダ山岳会のお世話になった方々、マイク副会長、ハウス職員、ガイドとキャンプマネジャーを招いての打ち上げパーティとなった。 (2006/5,2013/7 加筆)

<参考>

地形図のお国柄

この度、カナダで用いた地図は、"TOURING THE WAPTA ICEFIELDS"(1/5000)で、カナダ山岳会(ACC)クラブハウスで買い求めた。タイトルが示すように登山と山スキー用に描かれたもので、ルートとともに山小屋、危険箇所などが記されていた。等高線は茶色だが、その上から薄い青、淡い緑、白抜きと色分けされている。でも、その説明は見当たらない。また、気になったことは、青色で染められた箇所の等高線が、計曲線(太い実践)、主曲線(細い実践)ともに長い破線になっていることだった。これに関しても何の説明もないが、想像するに、青は氷原、氷河、緑は森林地帯、白抜きは雪に覆われているところを示し、等高線の破線は氷河が動いていることを示しているように思えた。

カナダで発行されている正式な地形図を見ていないのではっきりしたことは言えないが、先の地図では、日本で用いられている地図特有の記号がほとんど見当たらない。例えば、カナディアンロッキーの山々は岩山である。コースのナイルス山は、褶曲地層剥き出しの荒々しい四角形の岩山であった。しかし、地図を見る限り等高線のみで表現されており、日本で用いている岩やがけ(崖)の記号は見当たらない。

また、コースのハイライトであったバルフォア小屋から大分水嶺のハイコルへの氷河地帯の等高線は、破線で不規則に示されており、何となく氷雪が複雑に重なり合っていることを想像させていたが、ここでも岩や崖の記号は使用されていなかった。

最小限の施設で守られているカナディアンロッキーの山々が、氷河が瞬時に浮かび上がり、氷雪のピリッとした雰囲気まで感じ取れる美しい地図は、カナダに存在しないのだろうか。

30年ほど前、モロッコのアトラス山脈最高峰ツブカル山(4167m)の地形図をカサブランカで買い求めた。なんとも綺麗な色彩は、日本のそれを遥かに凌ぐものだった。また、同じ頃、朝鮮半島休戦ライン近くで日本海側のソラク(雪岳)山に行ったとき、韓国で求めた地形図が、日本のものと瓜二つだった。どちらもかつての宗主国からすると何となく納得できる。

2002年、アルプス第2の高峰、モンテローザから流れ出すグレン氷河を滑ったときに手にしたスイスの地形図は、品格ある色彩、精密極まりない地形描写による立体感は芸術品ともいえるものだった。青の等高線で表現された氷河は、氷の動きまで記されていた。その繊細さから岩と氷の山々の姿が容易に浮かび上がってきていた。

(2006/5,2013/7 加筆)